

フランス・ナント大学 留学体験記

経済学部 4年 成田倫史

私が留学させていただいたナント大学は、新潟大学と全学交流協定を結んでいます。そのおかげで、フランス語が専門ではない経済学部の私も留学することができました。また、JASSOの海外派遣プログラムによって返還不要の奨学金を月8万円頂いていました。それゆえ、留学の門戸がかなり開かれているといえます。そして何よりも、私のナント大学留学は、「なんとなくナント」という団体の存在抜きには語れないと思っています。詳しいことは同時期に留学していた盟友であり伝説の男、浦松君の体験記を参照してほしいのですが、一言で言い表しますと、全くフランス語ができない人でもそれなりに生活できるような、私たちが申し訳なくなるくらい手厚く充実したサポートをしてくれます。この点において、ほかの留学先に負けることはないと自負しております。心配せず来てください。

私は元々、フランス留学をするつもりで新潟大学を選択したので、入学してからもフランス語を履修し、新潟大学が主催するナント大学研修に1年の3月に参加しました。ナントはフランス人の選ぶ、住みたいまちランキング3年連続1位だったこともあり、暮らすのには申し分ないところだというのはその研修でも強く感じていたので、その点において不安はありませんでした。

また、私の留学の主な目的は、①日本語をできるだけ使わずにフランス語で考えることができるように、脳内にフランス語の回路をつくり、その反応速度を高めること②これまで避けてきた、自分と真摯に向き合って進路を決断すること、この2つでした。英語もそうですが、日本語とかけ離れた言語を学ぶときに日本語を介しては遅いと考え、自分なりに出した結論でした。その結果最終的には、フランス語の作文が苦ではなくなりました。フランス語でメモを書いてそのまま書き始める、ということは、日本語を訳したような、日本語っぽいフランス語を書かなくて済むようになったということで、そのことは収穫でした。そして結局、授業で一度も日本語を使って板書をとることはなかったです。それは、留学が決まったあと日本にいる間から試していたことだったので、そこまで苦ではありませんでした。日本に帰ってきてから暫く、自分が書く日本語の気持ち悪さが許せなかったのは秘密です。SNSでしか日本語と触れ合っていないと、実際に鉛筆を持って自分の手で書いていないと、日本語ですら埃がかぶってしまうことを痛感しました。必死にリハビリしています。



前期、後期のクラスメート！私の一生の宝です。

ここで書きたいことは山のようにありますが、10ヶ月の留學生活で私が強く感じ、あえてここで伝えたいことを話します。それは、日本での生活がそのままフランスでの生活に直結する、当たり前といえば当たりのことです。

例えば、フランスに到着してしばらく、日本では文法と読解中心の「テストのための」授業を受けてきたのもあって、先生の話をほとんど理解できないし、クラスメートと話すのに苦労する、という日々でした。また、同じレベルには日本人が私一人なので、何かがあるたびに私が日本を代表して話さざるを得ませんでした。「日本は怎なの？」という質問が授業中次々飛んできます。興味津々な目をしながら。そのときに話したいことを話せないという悔しい経験よりも、そもそも何を述べたらいいか分からない、そんな経験が多かったです。中身の無い、今どきネットで調べればすぐにでてくるような、そんな薄っぺらな自分の答えに授業後に嫌気が差したのを今でもはっきりと覚えています。フランス語力よりも、日本語力の問題だと。

問われているのは語学力なんかではなく、私自身の「人間力」のようなものでした。そもそも知らない、日本語ですら話せないことは当然フランス語で話せません。自分自身の専門である経済のことですら、まともに議論できない、いや、日本語でもできないのだろう、そんな自分がいました。そのときはただ率直に悔しかった。そのときほど、自分が日本人なのか、と思ったことはありませんでした。日本で普通に暮らしていたときは、日本のことを知らなくても余裕で生きていけた。でも、いったん外の世界に出ると、私も、あなたも、みんな「日本人」なのです。これは留學して改めて日本を、そして自分を見つめなおすきっかけになりました。今まで自分は何をしてきたのか、そしてこれからは何をしていくのか。

語学力以外の面でも、日本での自分とフランスでの自分とが変わらない、と思ったことがあります。例えば、私は日本で知らないひとの多くが一堂に会す

る飲み会等のイベントが得意ではないです。誰に声をかけていいか分からないからです。フランスでも、クラス分けされた最初はそうでした。でも、自分は1対1のコミュニケーションには自信があるので、大人数の場であろうと基本は1対1なのだから、と割り切ることでクラスメートと思ったより早く打ち解けることができました。苦手を克服しようとするより、得意なこと苦手なことまでカバーすればいい、気持ちが楽になりませんか。

もちろん留学をしなくても外国語は学ぶことができます。語学力を高めるだけなら、留学なんてしなくてもそこらへんにチャンスは転がっています。例えば短期研修に参加してみるでも、留学生を捕まえて話してみるでも。語学力で悩んでいるならまずはそのチャンスを生かすところから始めましょう。日本では、留学といえば特別なモノと捉えている人が多い気がしますが、そんなことはないと言いたいのです。やりたいことが海外にあれば行くし、そうでなければ行かない。貴重な日本での時間を捨て、多額のお金を払ってまでわざわざ行くというのを真剣に考える必要があるのではないかなど。留学に行くかどうか迷っている人にはその視点も持ってほしいのです。留学に行けば何かが変わるかもしれません。でも一方で、日本で得られたはずだったたくさんのチャンスを無駄にしているのです。

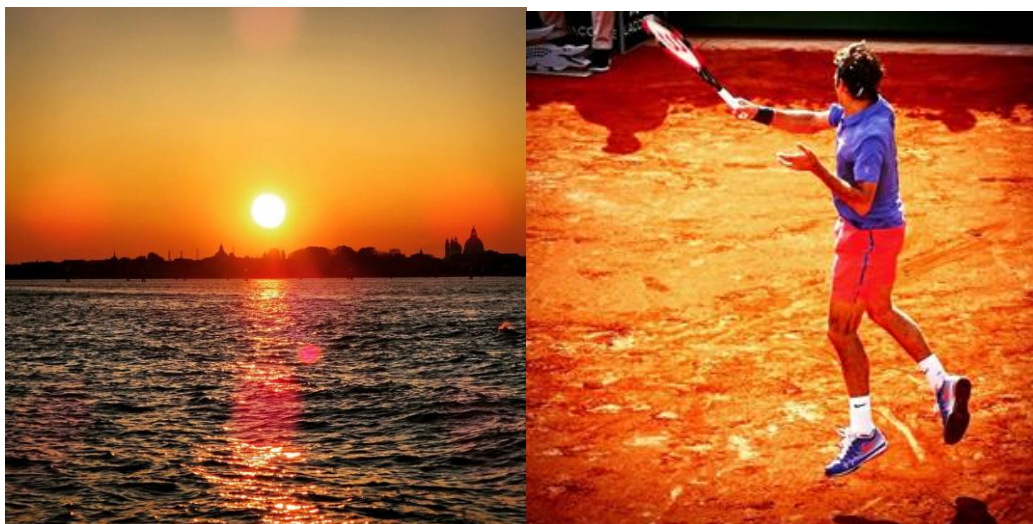
留学は自己実現の手段の一つでしかないとはよく言われることですが、選択肢はもちろんそれだけではないし、留学は全知全能ではない、と言いたいのです。私は、留学それ自体は全く後悔していませんが、一方でその逃したチャンスをひしひしと思い知る機会が帰国後多くあります。そのため、皆さんには多くの選択肢の中から自分に最も合う選択肢を選んでほしいです。その取捨選択の結果、「選ばれたのは、留学でした」となったとき、私はあなたの決断を支持しますし、私にできる範囲でのサポートをさせてください。私の親友が運営している留学ジャーナル **Yamabiko** もその一つです。

では、なぜ私たちは留学をするのでしょうか。留学のメリットとは何か。例えば私なら、それは語学の学習中に日本語をシャットアウトすること、すなわちその言語単独の思考回路を培うことに、その大きな意味を見出しています。勉強に最適な環境を自分の意志さえあれば簡単に作ることができるのです。その結果の一つが **DELF B2** の合格だったのかもしれませんが。そしてもう一つ、先ほども言いましたが、母国を離れ、ちっぽけな自分を相対化することで初めて見えてくるものがある、ということです。私の場合は、そのことが自分の留学の目標である自分の進路を決断する、ということにつながりました。自分の中で重視していくハッキリとした軸がいくつか見つかって、シンプルに生きられる

ようになりました。気にしなければならぬことが多い日本にいたら当然気づけてなかったでしょう。

あえて新潟大学にもう一年お世話になることにしたので、皆さんともお会いする機会があるかもしれません。これからの一年は、後輩たちに私が4年間で得てきた経験や繋がりを必要なところに還元していくことに尽きると思います。自分だけのものにしておくのはもったいない、そう、私の人生は身の回りの「もったいない」を1つずつ解決することでよりよくなってきているのです。

皆さんもぜひ、使えるところは使ってみてください。奨学金しかり、先輩しかり。案外、身の回りにこそチャンスは転がっているものです。私も周りの方々からもらってばかりです。頂いたものは自分のできることでまた次の世代に返す、そうやって私は生きてきました。



左)水上バスから望むヴェネチアの夕日。息をのむ美しさでした。

右)全仏オープンでのフェデラー。ぜひ皆さんもフランスに。

最後になりますが、お世話になったすべての方々にこの場を借りましてお礼を申し上げます。これだけ濃い時間を過ごせたのは皆さんのおかげです。ここには書ききれません。ありがとうございました。これだけの時間をかけて練りに練ったこの長い体験記が誰かのためになれば私は嬉しいです。最後までお読みいただきましてありがとうございます。